長官にきかれて、佐賀さんが一生懸命答えている。

自然を守る会のメンバーは、誰も彼も、あまりに真面目すぎて、シマらないけれど、どこかすごく暖いところのある人間ばかりである。私はじめ、自然を守る会のメンバーの誰しも会長の職業上のことをあまり意識してつきあっている人はいないと思うけれど、今度提出した霞ヶ浦水質浄化に対する請願書の内容をよく考えてみるともっとも、この内容をここまで煮つめるまでには、メンバーが何回も集っては、検討したのではあるけれど、根本に流れるものは、やはり会長の考え方である。私から見ると、その考え方の発想じたいが、実に医者らしいのである。

霞ヶ浦は今、死にかけている。いわば死にかけた病人である。死にかけた病人を救うにはどうしたらいいだろうか。それは、その病人にとって悪いと思うことを一切やめることなのである。

この請願書は、勿論、地元、土浦の市議会にも提出された。その時、紹介議員になってくれた若い議員さんが反対派の人たちから一時的につるしあげられた一幕があったとか無かったとかいうような噂（多分そういうことはちょっと考えられないから噂にすぎないだろうけれど）が流れてきた。議会というものは議案のよしあしでなく紹介議員が実力者であるかないかで議案が通ったり通らなかったりするものなのだろうか。

霞ヶ浦問題は、飲料水の問題だけでなく、商都土浦、観光地土浦の生きるか死ぬか、大げさにいえば、死活問題なのである。何も我々、医者や、天ぷら屋さんや、薬屋や、画家や、オバサンや、サラリーマンの、自然が好きだという理由だけで集まった素人のささやかなグループが、エッチラ、オッチラ、アンケートをしたり、署名運動をしたりして知事や、環境庁長官にお願いに行くまでもなく当然市長を中心にして、市議会議員、万場一致して決議して、県や国に働きかけてしかるべき問題だと思うのだけれど、そういう単純明解な発想がまかり通るのにはまだまだ時間と年月がかかるというものらしい。

市議会というのは（それは県会も、国会も同じなのかもしれないけれど）我々庶民には想像がつかないような犬が方々に自分のオシッコをして、自分の勢力範囲を決めていくような、勢力範囲みたいなものがあって、当然のことが当然でなくなり、当然でないことが、いつのまにかまかり通るような不思議な場所でもあるらしいということは、うすうす知っていたけれど、誰が考えても当り前な「霞ヶ浦水質浄化に関する請願書」を提出するに当って紹介議員がつるし上げられたという噂を聞くに及